

卷に、日本堤にさしか、れば、呼繼番屋の行燈星の連る光り、往來のまげきは、岸根の蘆の友摺さ
わぎ、中間の姿宿ありて、此所を忍び道具を萬かしける、或は長老の髭かけて、戀の奴となるもあ
り云々と見え、又西鶴二代男貞享元年印本八の巻、土手の數番屋日本堤燈うつりて、螢賣の里童子澤の
蓮葉かをり色こそ見えね、鞘とがめに水雞も叩て逃る聲、忍ぶ人の爲とて、懸髭布頭巾賣など云
云とあれば、焼印編笠の類にて、泥町の茶屋或は船宿にて、貸もし、うりありきもえたるなるべし、
作り髭は俳諧の發句におほく見えたれど、懸髭はいと稀なり、

七百五十韻延寶九年印本

前句 玉樓金殿耳せ、をみがきし

附句 久堅の雲の掛髭時めきて

春澄

政定

耳せ、といふにかけ髭とつけたり

片輪

〔増補下學集上二支體〕片破カタワモノ

〔書言字考節用集五肢體〕片輪カタワ本朝俗斥斥五輪不具者云爾騎騎

〔倭訓栞前編六〕かたわ 演繁露にいふ、疇人は是也、不具をいふ、倚或は缺をもよめり、片輪の義、車に

よていふ事、砂石集に見ゆ、公羊傳にいふ、隻輪也、佛書に五體を五輪といへば、さら也、源氏にある
かたわやと見えたり、

〔雅言集覽加十五〕かたは 廢人

〔和字正濫抄四〕中下のは

片羽者かたはもの うつば物語の歌に、矢につけて、かたはとよみたれば、矢のかた方のはねな
きは、用なきものなれば、それよりがたはと云ふことは出來歟、又矢にはぐも、本より鳥のはねな
れば、片羽なき鳥よりをこる詞歟、